

# 戸沢歌舞伎の栄枯盛衰



津谷歌舞伎（当時）

ここで使用しているイラストには、著作権等により使用制限（有料）されている画像も含まれていいる可能性がありますので、ご注意ください。

素人歌舞伎とは、歌舞伎を専業とする俳優以外の人たち（農家など）が主として時代物を演じる歌舞伎を言う。

（wikipedia より）

かつて、最上地域各地に素人歌舞伎（「地芝居」とも呼ばれる）があり、村の鎮守の祭りなどで盛んに演じられてきたが、やがて農村社会の変化に伴い、歌舞伎活動も失われることになった。歌舞伎の「傾く（かぶく＝かたむく）」からきていると思われる一風変わった異形を好む者や常軌を逸した行動に走る者を「かぶき者」と呼び、そうした「かぶき者」の斬新な動きや派手な装いを取り入れた「かぶき踊り」が現在の歌舞伎の起源となったと云われていますが、歌舞伎は演劇・舞踏・音楽を融合させた「総合的舞台芸術」と言っても過言ではないのではないか（鮭川歌舞伎保存会より）とも言われている。

多くの若者が熱狂した戸沢村においても、時代の流れとともに後継者はいなくなり、いつの間にか自然消滅の途をたどったが、若いも若きも関係ない熱中ぶりについて語り合った座談会（昭和40（1965）年 戸沢村史掲載）を紹介しながら、賑やかさ頃の戸沢歌舞伎について触れてみることにする。



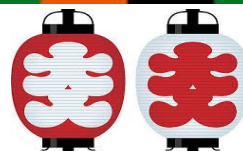
左は鮭川歌舞伎の一場面







歌舞伎（地芝居）はい  
つ頃、どんな目的で始  
まった？



影沢佐兵衛氏（明治元（1868）年生）  
が“130 年位前かな”と語っていたことが  
ある。（脚注 天保（1831～45）年  
間まで遡ることになる。）

（名高日栄座）



いやいや聞いた話ではもっとずうーと昔らしい、昔は武士の流れ者（浪人）やヤクザが至る  
処でバクチをやって旅費を稼いでいたが。地方  
の金持ち忠実もバクチに興味を持ち出し、また  
一般人も参加したことから、仕事もろくにしない  
ので考えついたのが芝居だった。殿さまも武士  
との関係から、ヤクザのバクチ禁止の為に一  
拳両得だけでなく、不良化防止、文化向上、娯  
楽と一石（三鳥にもなった）。

（蔵岡新栄座）



京塚（鮭川）芝居が文久（1861～64）の頃からとすれ  
ばおよそ 100 年前で、黒森歌舞伎よりも古いと言われる  
ところを見ると、（戸沢歌舞伎は）もっと古いものではな  
いか、と想像される。

当時としては大した娯楽もないので、非常に歓迎され  
て夜通し行われたものだと聞いている。（司 会）

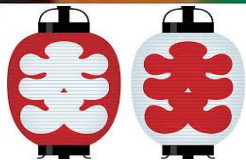


明治になって、巡査も藝舞伎を大いに奨励したそうだ。今80歳くらいの人（脚注 明治20年前後生まれか）が若い時代にもバクチが流行して、良家の息子が家から金を持ち出して、山中に小屋掛けてやっているのを見た巡査は取締りに困って、芝居を奨励し夜明けまで大いに”ぶて”と言った。当時の巡査といえば中々、権威があったので、その巡査が”ぶて”と言ったから堪らない”ぶつ”と言うのは「バクチを打つ」と。芝居をやることも「うつゑぶつ」と言った。巡査の”うて”は芝居を打て、ということで、それをバクチと聞き間違えたから堪らない。収まらないのは良家（金持ち）だ。おと（警察）がバクチ打ちを勧めるとは、とづりづり憤慨したそう。

（蔵岡新栄座）



芝居の指導はどうしたのか？




江戸の(歌舞伎)役者で相当うまい人に、沢村梅雪という人が流れて鮭川の上大淵辺りに来て”芝居を敷えてやる”と言ったが余り乗気がなかったので松坂に来た。義太夫語りには光太夫という人が同行して、中やうまかったので大歓迎されたそう。若者が同志を誘って熱心に稽古をし、毎日弁当を持ってコエ草(脚注 堆肥用)刈りに出て行くが、草は一本も刈らず、芝居の稽古だけだったそうだし、同志はコメ、味噌、小遣いをやって匿っておいたとのことだ。後になってその若者自身もその手だったが、若者の父も自分もやっていた手前、少しも叱らなかった… (松坂松栄座)



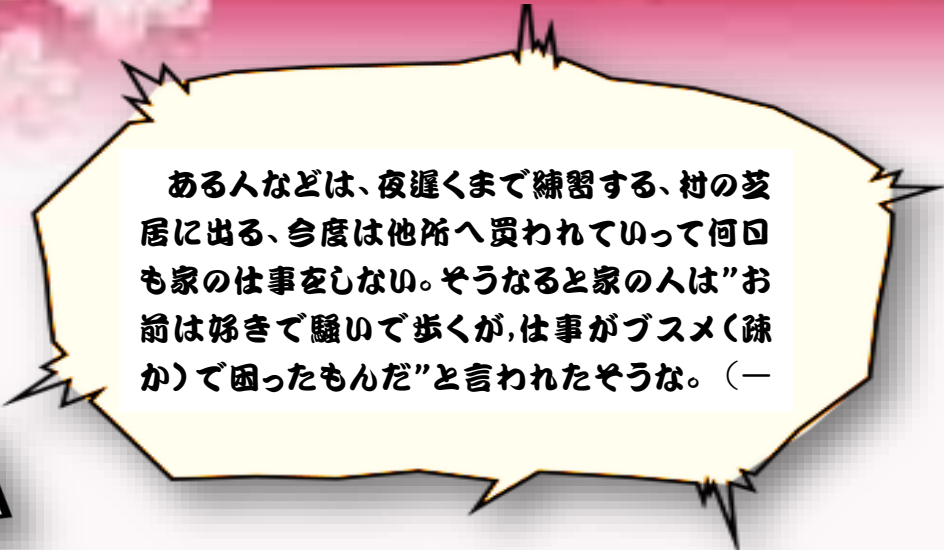
20歳頃、光太夫に40晩も通って「関戸」上下、「千本桜」、「恋の山」「将門」をものにして得意だったが、祖父もやったので朝、草刈りはその祖父が練習中にやってくれた。夜遅く…むしろ朝に帰って眠い孫を寝かせてくれて、その代りに”どうせやるなら恥ずかしくないやり方をせー”と、むしろ激励してくれたそう。 (名高日栄座)



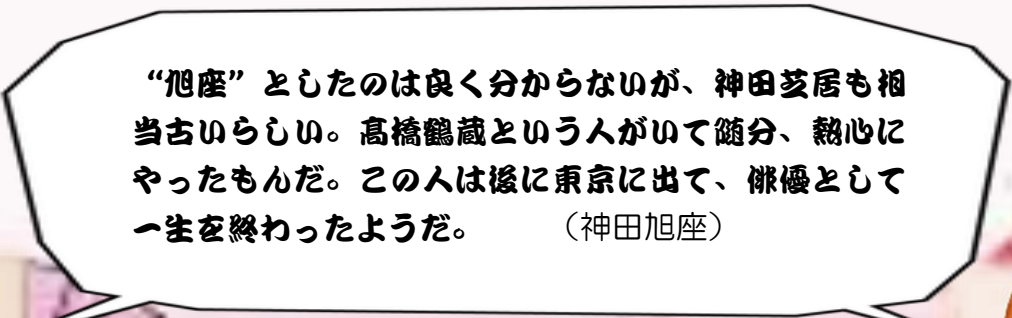



神田では“祟”が付かないのはなぜか？

(司 会)



ある人などは、夜遅くまで練習する、村の芝居に出る、今度は他所へ買われていって何回も家の仕事をしない。そうになると家の人には“お前は娯楽で騒いで歩くが、仕事がブスメ(疎か)で困ったもんだ”と言われたそう。 (一



“旭座”としたのは良く分からないが、神田芝居も相当古いらしい。高橋鶴蔵という人がいて随分、熱心にやったもんだ。この人は後に東京に出て、俳優として一生を終わったようだ。 (神田旭座)

由緒深い芝居であるだけに昭和30年頃、歌舞伎振興の意味で旧知が集って盛大な興行をやり、関東観光社長から立派な引幕の贈与をもらったそうだが、何十年もやらないが、（興行は）中々の出来映えだったそうですね（司 会）



年を取って、身体のがなれも思うようにならないし、それに中々（芝居に）あわせるのに一苦労だった。（一 同）

いやいやどうして立派なものだったそうですね（司 会）



少々ぎこちなさがあった。その主な理由は「系統」の違いによることからか。蔵岡芝居は、明治の初め大阪の浅尾五博に習ったもので、義太夫は青柳市五郎さんによるものだった。  
(蔵岡新栄座)



沢村梅雪は、江戸から来たというのが相当の年輩であったところを見ると、一線から引退して地方下りでもした人か。松坂で死んで、その遺骨を取りに二人の息子が来ていた。光太夫は五沢三津造と名乗ったが、原籍は西村山郡白岩町(現 寒河江市)で、本名は宗戸民治と言って松坂に婿入りして亡くなった。  
(松坂松栄座)



気分を出して一つやってみっか！  
名高！やるか！！  
いっいなーいつ読んでも（一同）

沢村という人は今、考えると技も玄派だが、書いた台本を見ると相当な人物のようだ。私に「東山浅倉宗吾」、「白州権問の揚」と「浅倉宗吾子別れの段」があるが、その案は非常に玄派なもので時々、朗読しても胸がスーとする文章です。  
(名高日栄座)

♪ 水の流れと人の身のはて 白糸の一筋に夫のたより  
待ちまちの うわさもいつかえはてて いつをかぎり  
いと内姓も 廻りかねたる糸車 夜なべ仕事にくだ  
す いとど涙をそそぎける♪ (名高日栄座)





この二人が来てからは、戸  
沢の歌舞伎もめっきり格上げ  
になった。（神田旭座B）

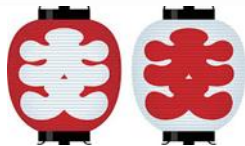
苦心・失敗、記憶に残る  
ことは？



今でこそ芝居なんて娯楽一点張りのようだが、お師匠格の人から  
習うときは中々、礼儀正しく、まず芝居の作法をひと通り教わる一種  
の修業のようなものであった。寒稽古は土間に薄いムシロを敷き、  
ゆやゆやした所に端座してのことで、中々ゆるくなかった。

（松坂松栄座・岩清水岩栄座・津谷若栄座・名高日栄座）





各座の得意題目は)何でもやったが、強いて言えば松坂「安達が原」、神田「義経千本桜」、名高「忠臣蔵」、岩清水「木蘭記」、津谷「一の谷」、蔵岡「忠臣蔵」そして本郷「義経千本桜」かな。これをやる時は各々の因は光った。


(一 同)

よく夕方から始めて翌朝3時頃で霜の降りる頃やっと終わって、芝居見が家に帰ると、若衆は“これから寝ると寝忘れるから”とそのまま朝草刈りに行ったものだそうだが。

(司 会)







私達はお互いが化粧をし合う。平素、野良縁ぎでふしくれだって、  
焼けねっこのように、日焼けしたところに白粉を付けるのだが、中々  
化粧がのらないで手間がかかるし、男の化粧で下手ときている。

見物人は「幕をあけろ」「早くせよ」「夜が明けるぞ」と急き立て  
ると、する方（演者）はいよいよ狼狽えるので余計、手間がかかる。  
やっと幕を開けて“やれやれ”と思うと、刀を忘れる、慌てたのか兜  
の紐も結わり付けないうで、舞台に出た途端に兜を落として笑われ  
たりもしたし、よがって（緊張して）台詞を忘れる人も出る。観衆は  
「早く援ろで散えろ」「台本を渡せ」など野次る。（一 同）

そんな時、座長格の皆さんは  
気がイライラしたもんでしょうな。  
しかし、中々上手な人もあって本  
物役者やちのけの人もあって、  
よく寝められたようではありませ  
んか。（司 会）

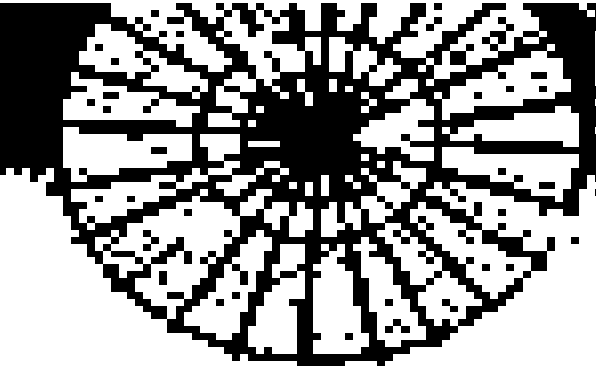


よく夕方から始めて翌朝3時頃で霜の降りる頃  
やっと終わって、芝居見が家に帰ると、芸衆はこれ  
から寝ると寝忘れるとそのまま朝、草刈りに行った  
ものだそうだが…いかがですか…（司 会）

私達はお互いが化粧をし合う。平素、野良縁ぎでふくれだって、焼けねっこの  
ように、白焼けしたところに白粉を付けるのだが、中々化粧がのらないで手間が  
かかるし、男の化粧で下手ときている。

見物人は「幕をあけろ」「早くせよ」「夜が明けるぞ」と急き立てると、する方  
（演者）はいよいよ狼狽えるので余計、手間がかかる。やっと幕を開けて“やれ  
やれ”と思うと、刀を忘れる、慌てたのか兜の紐も結わい付けしないで、舞台に出  
た途端に兜を落として笑われたりもしたし、よがって（緊張して）台詞を忘れる人  
も出る。観衆は「早く後ろで散えろ」「台本を渡せ」など野次る。（一 同）






そんな時、座長格の皆さんは気がイライラしたものでしょうな。しかし、中や上手な人もあって本物役者  
やっちのけの人もあって、よく寝められたそうではあ  
りませんか。  
(司会)



その寝め方もあるっているものがあって、「うまいぞ千  
両」は良い方で、「うまいぞ下手くさー」「うまいぞ肥料草  
刈りー」など言うと、寝めた人を野次するのもあって台詞の聞  
こえないこともあった。どんなに言われてもやっている人は  
実に本気でやった。  
(一同)



将川に買われていった時、黒森勢舞伎と向かい合って架け小屋が出来てお互い競った。その時に荒川  
治兵衛さんが壮年会長で、祭旗を持って行ったが、名高の方は技において少々劣るような気がしたが、荒  
川会長の指示で黒森側のやっている時、ダガダガはやし立てたので、黒森側はほうほうの体で引揚げた  
ことがあった。  
(名高日栄座)



岩清水荃居が古口に買われていった時、イカ中毒で腹痛を起こして困ったことがあったし、どこに買われていった時だか忘れたが、岩清水荃居は上手だと評判もあって、余りに寝められて、大いに舞台を跳ね回って舞台下に転げ落ちて大困り、観衆は大はしゃぎになったこともあった。

(岩清水岩栄座)



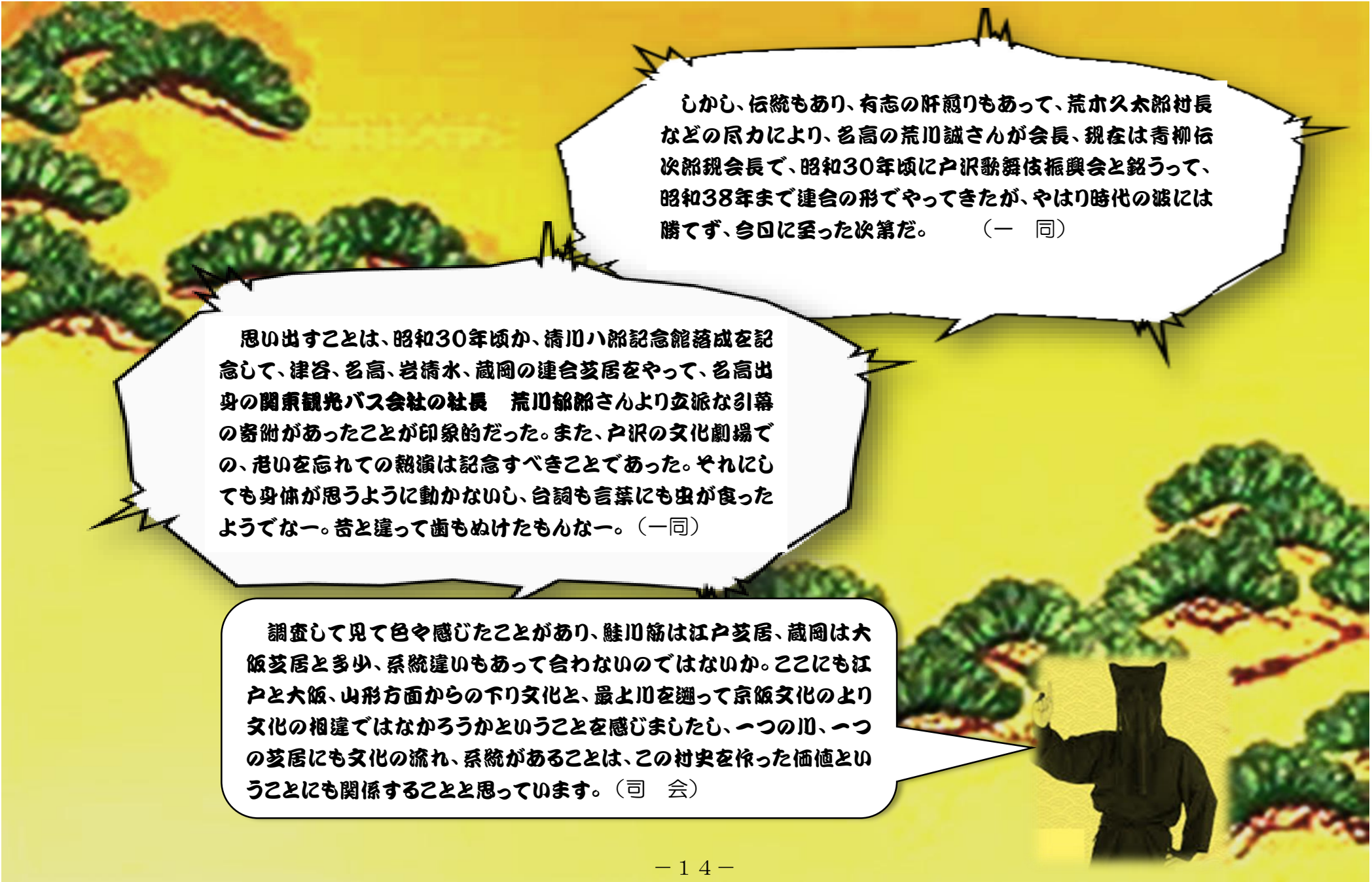
沢村梅雪の技は大したものでした。私は村のこの道の先輩である寧食伝左工門さんから聞いたのだが、梅雪が将棋盤のよで踊ると8畳間いっばいに広がるようになり、全く見惚れてゐるばかりであったとのことだった。私の村にあった梅雪の記念品も大切に保存されてあったが、保存先の家の失火で烏有（うゆう＝皆無）に帰したことは誠に残念であり、皆さんの村々に残っている記念品を見るにつけ、苔が蘇ってきます。（角川本郷座）



（歌舞伎は）いつまで続いたのか？

終戦になって、中央から劇団や浪花節語りが地方に下ってきた。新庄あたりには一流どころが次々とやって来る。我々の土奥の、のろまな、幕間の長いものは、ピンぼけでは中々受けてくれないうし、何回も練習して金を掛けても流行らない荃居になってしまって、いつとは無様に腐れていったのではなかろうか。多分、昭和29年頃でひと盛りが過ぎた感じでしょうか。（一同）





しかし、伝統もあり、有志の肝煎りもあって、荒木久太郎村長などの尽力により、名高の荒川誠さんが会長、現在は青柳伝次郎現会長で、昭和30年頃に戸沢歌舞伎振興会と銘うって、昭和38年まで連会の形でやってきたが、やはり時代の波には勝てず、今日に至った次第だ。（一 同）

思い出すことは、昭和30年頃か、清川ハル記念館落成を記念して、津谷、名高、岩清水、蔵岡の連合芝居をやって、名高出身の関東観光バス会社の社長 荒川郁郎さんより立派な引幕の寄附があったことが印象的だった。また、戸沢の文化劇場での、老い忘れての熱演は記念すべきことであった。それにしても身体が思うように動かないし、台詞も言葉にも虫が食ったようだなー。昔と違って歯もぬけたもんなー。（一同）

調査して見て色々感じたことがあり、鮭川筋は江戸芝居、蔵岡は大阪芝居と多少、系統違いもあって合わないのではないかな。ここにも江戸と大阪、山形方面からの下り文化と、最上川を遡って京阪文化のより文化の相違ではなかろうかということを感じましたし、一つの川、一つの芝居にも文化の流れ、系統があることは、この村史を作った価値ということにも関係することと思っています。（司 会）



鮭川歌舞伎



**大入**盛況だった、かつての津谷歌舞伎千秋祭の一場面



鮭川歌舞みために若者が興味を持ち、いつか“**とざわ芸術文化フェスティバル**”で戸沢歌舞伎を再現できるようにあればいいな（編集後記）







## 歌舞伎衣装と台本(津谷)

